

## ギャップイヤー入試

——どのようにギャップイヤーと入学試験を結びつけるか——

中津将樹（国際教養大学）

入学前に一定の活動を合格者に義務づけるギャップイヤー入試の出願者は、年々増加している。合格者は大学による助言、指導を受けた後に国内外でボランティアなどのギャップイヤー活動を行ない、入学後に単位を取得することができる。同入試は多様な学生を確保することができる手段として有効である。

### 1 ギャップイヤー入試とは何か

国際教養大学では、2008年度よりギャップイヤー入試を実施している。これは、合格者に大学入学までの一定期間ボランティアやインターンシップなど、いわゆるギャップイヤー活動を義務づける制度である。

この入試は、国際教養大学が行なう16種類の学部レベルでの入試形態の一つであり、9月入学を前提としている<sup>1)</sup>。当初は、一般選抜の一形態として3月に日本語と英語による面接（ギャップイヤー活動に関するプレゼンテーションを含む）、大学入試センター試験の成績、出願時に提出される調査書やギャップイヤー活動計画書をもとに選考していた。しかし、2012年度からは特別選抜の一つとして、前年11月に入試を前倒し実施しており、受験生には大学入試センター試験の成績に代え、英語による小論文を課している<sup>2)</sup>。

定員10名に対し、初年度は僅か11名の出願であったが、その後徐々に出願数は増え、2011年度には77名の出願があった。選抜時期を変更した2012年度は46名の出願があった。これまでの5回の入試で合計52名が入学している。

2012年度は、定員175名に対し181名が入学したが、そのうちの10名がギャップイヤー入試合格者であり、その比率は6パーセ

ントである。

ギャップイヤー入試にかかる人数の推移

年度	定員	出願	受験	合格	入学
2008	10	11	9	5	5
2009	10	32	32	12	12
2010	10	47	39	12	12
2011	10	77	64	14	13
2012	10	46	46	10	10

### 2 なぜギャップイヤー入試なのか

国際教養大学は2004年に秋田県が設立した日本初の公立大学法人である。「国際教養 (International Liberal Arts)」というこれまでの日本の大学にはなかった新しい教学理念を掲げ、英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と豊かな教養、グローバルな専門知識を身につけた実践力のある人材を養成し、国際社会と地域社会に貢献することを目標にしている。「授業はすべて英語」「一年間の留学義務づけ」「米国式教養教育」「少人数教育（一クラスあたり平均学生数18名）」「24時間開館の図書館」「学内の学生の2割は留学生」「一年間の寮生活の義務づけ。留学生との相部屋」などの特徴を持ち、カリキュラムについても Semester制、科目コード、GPA制度の導入などグローバル・スタンダード（国際基準、世界

基準)を取り入れている。入学時期は、開学時より4月入学とともに9月入学も実施しており、日本人、外国人ともに出願することができる。

なぜ、国際教養大学はギャップイヤー入試を導入したのだろうか。国際教養大学は、国際社会や地域社会で活躍できる人材を育成することを目標としている。そのためには単に筆記試験の成績が良い学生だけでなく、海外経験を有する学生、課外活動を一生懸命行っている学生など、さまざまな個性を持つ学生を受け入れることが必要と考えている。異なる個性を持つ学生がキャンパス内に集まり切磋琢磨することは、学生相互や教職員にとって非常に良い刺激であり有益である。そのため、AO・高校留学生、高校推薦(指定校制度はない)、社会人、帰国生、外国人留学生、(秋田県内の高校生を対象とした)グローバル・セミナーなどの特別選抜入試、1科目型、3科目型、5科目型など大学入試センター試験と個別学力試験の受験を必須とする一般選抜入試を行なっている。それぞれの入試の出願要件や選抜形態も異なるために、多くのユニークな学生が集まる。

ギャップイヤー入試では、高校卒業後にすぐに進学する「普通の日本人高校生」ではなく、一定期間自分の希望する活動を大学入学前に行なうことを考えるようなユニークで外向き志向が強く、積極的な学生をターゲットとしている。言い換えれば、高校での勉強からすぐに大学での学問修得に移行せずに、ある程度の猶予期間(ギャップイヤー)を設け、さまざまな活動を通じて、大学で学ぶ準備としてグローバルな知識や思考能力をより能動的、具体的に身につけ、かつ精神的にたくましい学生に入学してほしいと考えている。

これらの大学の理念や目標、特徴や入試形態を考えるならば、英国で実施しているギャップイヤー制度を9月入学のための選抜形態

の一つとして導入することは、グローバル・スタンダードを目指す大学としては極めて自然な動きであったといえよう。

### 3 いつギャップイヤー活動を行なうのか

9月の入学に先立ち、前年11月に合格したギャップイヤー入試の受験者は「入学予定者」として扱われ、高校を卒業する翌年3月までに担当教員より活動内容などに関し、メールや電話などで助言、指導を受ける。この間、出願時に提出したギャップイヤー計画の修正や大学での活動内容の事前発表などを行なう。実際の活動は、高校卒業後の4月より大学入学前の8月までにそれぞれの計画に基づき実施する。その間にも担当教員との定期的な連絡や経過報告は欠かせない。入学後には、これまでの活動に関する英語によるレポートの提出と発表を行なうことにより、「インターンシップ」として3単位を取得することができる。

### 4 どのようなギャップイヤー活動を行なうのか

ギャップイヤー入試を経て入学した学生はどのような活動を行なったのだろうか。

大学の入学者選抜要項には活動の例として、ボランティア研修、フィールドトリップ、部活動における後輩育成が記載されている。しかし、ギャップイヤー入試を通じ、これまで入学した学生の活動で最も多いのがボランティアであり、約半数を占める。昨今、高校生にとってボランティアは非常に人気のある活動であるためだろう。次に多いのが語学学校、NGOやNPOなどでの研修、アルバイトなどである。語学学校での研修が多い理由は、国際教養大学の授業はすべて英語で行なわれているため、語学力の向上を目的としたものと思われる。アルバイトについては活動実施のための費用や生活費の捻出のためである。

また、一学生あたり 2.2 件の活動を行なっている。前半に活動の受入団体との連絡やアルバイトによる費用の捻出、後半に実際の活動を行なうパターンが多い。

さらに、全体の 6 割が海外で活動を行なっている。これは、国際教養大学の特徴を考えると、**「外向き志向」**が強く、海外で活動することに積極的な高校生が出願していることを証明している。

なお、大学は活動の期間や内容、活動場所に関し、制限や指定、斡旋は行なっていない。また、活動中の経費は保険を含め本人負担であり、奨学金や活動資金の支給など大学からの財政的な支援は行なっていない。事故などの責任も本人が負うことになっている。

## 5 他のギャップイヤーとの違いは何か

これまで説明した国際教養大学のギャップイヤー入試は、ギャップイヤー発祥の地といわれる英国の場合と、どのような点が異なるだろうか<sup>4)</sup>。

英国では、入試とギャップイヤー活動はほとんど関連していない。そのためギャップイヤー入試という制度も存在しない。日本の大学では、受験する際に入学時期は設定されているのに対し、英国の大学では、受験生は出願する際に「2012 年度入学希望」「2013 年度入学希望」など、合格した際の入学年度や時期を明記する。その結果、選考時期から入学までの時期がギャップイヤー期間となる。至近の入学時期を選択した受験生はギャップイヤー活動を行なわずに入学するが、一年後の入学を希望した学生は、一年間がギャップイヤー活動期間として扱われる。つまり、英国では「合格通知」は大学による「入学許可証明」なのである。大学にとっては、受験生がギャップイヤー活動を行なうかどうかは、入試制度や選抜方法には直接関係することはなく、また受験生にとっては必ずしも義務ではないのである。ギャップイヤー活動

は、あくまでも受験生の自発的な意思であり、大学はギャップイヤー活動に関する受け入れ機関の紹介や指導などの関与は一切行なっておらず、活動に関する単位認定も行なっていない。

日本においては、筆者の知る限り、国際教養大学以外に名古屋商科大学がギャップイヤー活動を奨励している。ただし、入試との関連はなく、大学が実施するオリエンテーションに参加した後、学生は 1 年次あるいは 2 年次の 1 学期間、海外等で研修を行い、大学は一定の単位を認定している<sup>5)</sup>。

そのため、日本のギャップイヤーは、学生の活動に大学が関与するという点において英国とは大きく異なるため、「日本版ギャップイヤー」といわれている<sup>6)</sup>。

なお、国際教養大学が実施しているギャップイヤーと東京大学が想定しているギャップタームとは、活動を行なう期間に関しては一部は一致しているが、大学の関与という点では大きく異なる<sup>7)</sup>。第一に、国際教養大学は入試の一環としてギャップイヤー活動計画を合否の基準の一つに扱っているのに対し、東京大学は入試とは全く関連させていないことである。第二に、前者は活動をギャップイヤー入試合格者に義務づけており、担当教員が積極的に指導、助言しているのに対し、後者は活動が任意であり、大学による関与はない。第三に、国際教養大学は入学後にその活動内容に基づき単位認定されるのに対し、東京大学の案ではそのような制度はない。

日本では、ギャップイヤー活動を大学の教育の一環として位置づけ、奨励している大学は数少なく、さらに、その活動を入試と関連させて学生に実施を義務づけ、また入学後の単位として認定、付与している大学は国際教養大学だけと思われる。なお、国際教養大学では、学部レベルのみならず、大学院レベルでも入学前の学生に対しギャップイヤー活動を認め、その成果に対しては入学後に単位を

与えているが、活動と関連させた入試は行っていない。

## 6 ギャップイヤー活動のメリット、デメリットは何か

これまで、国際教養大学はギャップイヤー入試を5回実施したが、このような特殊な入試を行なうメリットは何だろうか。

最大のメリットは、多様な学生が確保できることである。多くの高校生が卒業後すぐに大学に入学することを希望しているのに対し、あえて入学時期を半年間延期し、その間にボランティアや研修などの活動を行なう積極的な学生は、ある意味、現在の日本社会では特異な存在かもしれない。しかし、彼らがギャップイヤーでの経験を大学入学後の勉学や生活に活かし、また他の学生や教職員に伝え共有することは、学内に非常に良い刺激を与える。実際、彼らの経験を耳にし、大学在学中にボランティアや研修を行なう学生も多い。

学内の調査によれば、入学後の英語の成績(TOEFL)や履修科目の成績(GPA)は他の入試で合格した学生と大きな差異は見られない。学業の点では他の学生と差異はなく、むしろ社会での経験を有するバイタリティのあるタフな学生がギャップイヤー入試で入学してきている。

では、デメリットはあるのだろうか。大学にとっては、非常に労力を費やす作業が伴うことである。通常の入試では、合格者に対する入学前の作業として合格通知や入試関連書類を配布するだけである。しかし、ギャップイヤー入試の場合は、合格者に対する電話やメールによるギャップイヤー活動に関する助言や指導、事前の大学での発表会の開催など多くの業務が発生する。また、合格者が9月に入学する場合は、通年制からセメスター制(二学期制)への変更、単位の認定などカリキュラムの改革も必要になる。さらに、学生

にとっては、活動中の費用が発生することになり、経済的な負担も生まれる。

## 7 ギャップイヤー入試は根づくのか

ギャップイヤーに関しては、これまで政府や企業は好意的に評価している<sup>9)</sup>。特に、2012年1月に東京大学が秋入学の検討を表明して以来、ギャップイヤーに対する関心はいっそう高まってきている。入学前あるいは在学中にボランティアやインターンシップなどの就業体験を行なうことは、大学での勉学意欲に大いに良い影響を与えるだろう。また、職業意識を植えつけることにもなり、キャリア教育の一環としても有効である。ギャップイヤー活動を企業が積極的に評価していることは、学生のキャリア形成はもちろんのこと、就職活動のためにも有力な武器になりうることを示している。

前述のように、ギャップイヤーに先駆的な英国では、大学はギャップイヤー活動に関与せず、むしろ学生が自ら活動を選択し、活動場所や期間を決めている。しかし、ギャップイヤー活動がまだ根づいていない日本では、大学が学生に自主的な活動の実施を義務づけても、ともすれば学生は何をやってもよいかかわらず、結局「遊んでしまう」懸念がある。また、活動の受け入れ先となる企業や団体も戸惑いを覚えるかもしれない。それならば、当面は大学が学生のギャップイヤー活動に関与したほうが良いだろう。つまり、学生に対するギャップイヤーに関する意識を植えつけるワークショップの実施、事前の助言や指導、学生の活動を受け入れる団体の斡旋や紹介などを大学が積極的に行なうことにより、学生の活動を奨励、支援することが必要である。キャリア教育の一環と位置づけることにより、義務化や単位の付与などを検討することも重要であろう。

では、ギャップイヤー活動と入試をどのように関連させるのが良いのだろうか。もし大

学が「求める学生像」あるいは「社会に輩出したい学生像」として「積極的に社会活動をする学生」「社会に対する問題意識の高い学生」「国際社会や地域社会で活躍したい学生」を標榜するならば、大学のメッセージを社会に伝え、これらの資質を持つ高校生を確保する手段として、ギャップイヤー入試は有効である。その際には、面接や筆記試験を通じて意思や実現性などを確認する必要がある。もちろん、前述の活動に対する助言や指導、紹介や斡旋、単位認定などを含め、大学としての積極的な関与は必須である。

国際教養大学では、ギャップイヤー入試を始めて5年目を経ているが、学生の勉学への意欲は高く、学内の成績も他の入試で入学した学生と差はない。むしろ、入学前のギャップイヤーの経験を入学後に他の学生に話すことにより、学内ではボランティアやインターンシップなど目を外に向けて積極的に活動する学生が増えている。まさに大学が欲しいタイプの学生を確保しているといえる。ギャップイヤー活動を行なう積極的でタフな学生は大学内のみならず、日本の社会に対しても必要であると認識しており、今後も本学としては、ギャップイヤー入試を継続するつもりである。

ギャップイヤー入試を廃止するのは、義務化せずとも、多くの学生がギャップイヤー活動を積極的に行なう時かもしれない。

## 注

- 1) 国際教養大学では2004年の開学時より9月入学を実施している。ギャップイヤー入試の他に、「AO・高校留学生入試」「帰国生入試」「外国人入試」により、9月に新生を受け入れている。2012年度の秋入学者（交換学生を含む）は162名おり、同年度の全新生に占める比率は47パーセントであった。
- 2) ギャップイヤー入試を一般選抜入試の一

形態として実施していた際には、他の入試との併願者が半分以上を占め、ギャップイヤー活動を深く理解せず応募する受験生もおり、学内でその趣旨と実際の乖離に関する疑問が寄せられた。そのため、同入試の趣旨を理解し、より主体的な高校生の受験を促すために入試時期を数ヶ月早め、特別選抜の一形態として実施することにした。

- 3) 国際教養大学は40カ国・地域140大学（2012年11月末現在）と協定を締結しており、すべての学生はこれらの大学に留学することが義務づけられている。
- 4) 英国の民間団体の調査によれば、同国の大学生の約11パーセントは大学合格後に入学を一定期間延期しギャップイヤー活動をしている。（Pope, J. (2005) "Gap Year' Provides A Different Education," *The Washington Post {Washington D.C.} 28 Aug. 2005 A5.*）
- 5) 名古屋商科大学ホームページ (<http://www.nucha.ac.jp/>)
- 6) 一般社団法人日本ギャップイヤー推進機構協会ホームページ (<http://japangap.jp/>)
- 7) 東京大学の案では「ギャップターム」と記載しているが、国際的には、たとえその期間が一年未満あるいは一年以上であっても「ギャップイヤー」という言葉が一般的である。
- 8) 東京大学の案では、活動実施時期に関し、「高校卒業後から大学入学までの期間」のほかに「大学在学中」「大学卒業後から就職まで」などが想定されている。
- 9) 2007年に行なわれた教育再生会議の第2次報告書では9月入学促進と日本版ギャップイヤーに関する提言が盛り込まれている。また、2002年の中央教育審議

会の答申でもギャップイヤーに関する言及がある。さらに、2011年度版の労働経済白書では教育現場でのギャップイヤーの導入が提言されている。